

# ナオトとミカ



暁 あかつき

ゆりの

おれ、本田直人。小学六年生。好きな科目は音楽と体育。嫌いな科目は国語、算数、理科、社会……早い話が、勉強は嫌いなんだ。おれの通知表のコメント欄には、毎回同じことが書いてある。「落ち着きがない」「集中力に欠ける」「授業中騒がしい」みんなはおれのことを、なんの悩みもない元気印の小学生だと思ってる。だけど実はちがうんだ。おれは今一つだけ、めちゃくちゃ悩んでることがある。それがさ、ちよつと言いくいんだけど……片想いってやつなんだ。

相手は同じクラスの白川美香。雪みたいに色が白くて、宝石みたいに目がキラキラ輝いてて、肩にかかる髪はつやつやサラサラのとびきりの美少女。

ただ、ミカは全校一のノツポで、悔しいことに、おれよりもずっと背が高いんだ。

「おい、ガリバーミカ。おまえでかいから黒板みえねえよ」

「うるさいわねチビ。見えないんなら誰かに肩車してもらえば」

これが、おれとミカの日常会話。そう。おれたちはクラスでも有名な犬猿の仲間なんだ。

ケンカをしても、ミカはぜったい逃げたり泣いたりはしない。それどころか、ちよつとからかったら十倍ぐらい言い返すし、軽くチョップでもしようもんなら、連続パンチに回し蹴りまで返ってくる。それが楽しくて、ついちよつかいを出しちゃうんだ。

ミカはおれとちがって、すごく頭がいい。おれは自分が勉強できないのをいいことに、よくミカを頼りにする。

「ミーカちゃん。おれさ、宿題わかんなかったんだよ。教えてほしいんだけどなあ」

こんな時だけ、おれは猫なで声を出す。

「なんだ、こんなこともわからないの。ほんとにバカね。そんなんじゃ小学校卒業できないわよ」

と言いなながらも、ミカは宿題を教えてくれる。

「だからね、ここはふつうにかけ算すりゃいいのよ。そしたら……」

その間おれは、鉛筆を持つミカの白くてほっそりした手に見とれたり、時々ふわりと香るシャンプーの匂いにドキドキしたり……。けっきょく、勉強なんてちよつとも頭に入らないんだ。

せっかく楽しい学校生活だけど、とうとう三学期になっちゃった。だんだん卒業が近づいてくる。中学へ行っても、ミカと同じクラスになりたいなあ。でも、ミカ

はおれと同じ地元の中学に行くのかなあ。それを確かめたいのに、くだらないケンカばっかして、なかなか聞けないんだ。

一月二十三日。給食で大好物のプリンが出た。もう卒業が近いから、給食でプリンを食べられるのは、これが最後かも知れない。そう考えたら、プリンが貴重に思えて、一口一口味わいながら食べた。

「ああ、おいしかった」

食べ終わってふとミカの机を見ると、まだプリンが残ってる。いたずら心にスイーツが入った。

「なんだ、おまえプリンいらないの？　じゃあおれが食べてやるよ」

そう言って、ミカのプリンを横取りしてやった。

「あ、何すんのよ！　返しなさいよ！　プリン好きだから最後に残してたのに」

その時、ミカが振り回したプラスチックのスプーンがポキリと折れて、おれのおでこを引っかいた。

「痛っ」

おでこを触ってみると、指にべっとり血がついた。

ミカは、目をいっぱいに見開いたまま、固まっていた。

「だって……あんたが余計なことをするからじゃない」

おでこから血が出るぐらい、大したことじゃない。それよりも、ミカの声がふるえているのに驚いた。

ミカは自分のハンカチをポンとおれの机の上に置くと、食器を下げて教室から出て行った。

周りの奴らがざわめき始め、先生が立ち上がった。

「保健委員さん、本田くんを保健室に連れて行ってあげて。先生は白川さんの様子を見てくるから」

先生も教室を出て行った。

その日の夕方、ミカとミカのお母さんが、おれの家を訪ねてきた。ミカのお母さ

人も長身の美人で、ミカとよく似てる。

「うちの子がケガをさせてしまって、本当に申し訳ありません」

ミカとミカのお母さんが、そろって頭を下げた。

「いえいえ、気にしないでください。ケガなんてしょっちゅうだし、大したケガじゃないですから。それよりうちの子が給食のプリンを横取りしたみたいで、ごめんなさいね。やるのが幼児並みで、情けないわ。直人、元はと言えばあんたが悪いんだから、あんたも謝んなさい」

「ごめんなさい」

おれもミカも、親に言われるまましかめっ面で謝った。こういうのは苦手だ。

次の日はお互いに気まずくて、何もしゃべらなかつた。だけど二日もすると、ミカにちよっかいを出したくて、ウズウズしてきた。

こんなに気まずいのもうやだ。ちよっかい出して先生に怒られても、謝ればいいや。

「おい、ガリバーミカ」

「うるさいわねチビ」

おれが仕掛けたら、ミカもすぐ乗ってきた。やっぱりこうでなくちゃ。久しぶりに絡んだら、楽しくて仕方ない。なんだか嬉しくなって、ニヤけながらミカと言い合った。

二月十四日。バレンタインデー。おれはどう見ても義理チョコっていうのを二個と、ちよっと本気っぽいのを一個もらった。もちろんミカからじゃない。そうだな。ミカがチョコレートなんかくれるわけないよな。

諦めて帰ろうとしたら、ミカに呼び止められた。

「ナオト、ちよっと待って」

思わずドキッとした。

「え、なんだよ」

「いいから来てよ」

ミカに手首を引っぱられて、人気ひとけのない非常階段の所まで来た。

「なんだよ」

「はい、これ」

ミカがピンク色の紙袋をおれに差し出した。

「え？」

「今日は二月十四日でしょ」

体じゅうに電気が走った。

「うそだろ!？」

「じゃあね」

ミカはそのまま風のように走り去って行った。

「やったあ！」

俺は今まで十二年間、こんなに感動したことはない。サッカーの試合でゴールを決めて地区大会に優勝したときは、めちゃめちゃ嬉しかった。でも今の感動は、それを超えている。この気持ちを誰かに伝えたい。そう、誰でもいいんだ。

嬉しくて廊下を跳びはねてると、ケンちゃんの姿が見えた。よし、ケンちゃんに決めた。

「ケ、ン、ちゃん」

ケンちゃんは、だるそうにふり向いた。

「なんだ、ナオトか」

愛想のない返事だ。だけど、そんなことはどうだっていいんだ。

「ケンちゃん、チョコレートもらった？」

「うん。義理チョコ一個だけ」

「ふうん」

どうしても顔がニヤけてしまう。

「なんだよ。おまえもらったのか」

「へへへ。聞きたい？ 聞きたい？」

「気になるじゃん。誰にももらったんだよ」

「そうまで言われちゃあしょうがないなあ。実はさ、おれミカにももらったんだ」

「へえ、すごいじゃん」

聞くが早いのか、ケンちゃんはその辺にいる奴らに言いふらした。

「おいおい、ナオトがミカにチョコレートもらったんだって」

「エー、ほんとかよ」

「おい、ナオトがさ……」

まるで伝言ゲームみたいに噂はどんどん広まって、おれの周りはやじ馬の野郎どもでいっぱいになった。なんだかよく知らない他のクラスの奴までいる。みんなチョコレートを期待して、学校に残ってたらしい。

「なあ、早く開けるよナオト」

ギャラリーは興味津々。イベントなみになってきた。

「でも、みんなの前で開けたらミカに悪いなあ」

と口では言いながら、おれの気分はすっかり天狗だ。

「なに言ってるんだよ。開けちゃえ開けちゃえ」

「しようがないなあ」

紙袋を開けると、小花模様の包装紙にピンク色のリボンがかかった掌にのるくらいのかわいい箱が出てきた。いかにも女の子らしい感じがして、ますます感激した。それからゆつくりとリボンをほどいて、破らないようにそうつと包装紙を開いた。いんな息を吞んで注目してる。おれも胸がドキドキして、手が震えてきた。

深呼吸してから、覚悟を決めて箱のふたを開けた。

「……」

なんだこれ？ アルミホイルを丸めたボールみたいなのが入ってる。この中に手作りのトリュフチョコでもあるのかな。

アルミホイルを剥がすと、中からまたアルミホイルのボールが出てきた。また剥がすと、同じようにアルミホイルのボール。剥がしても剥がしてもアルミホイルで、だんだんボールが小さくなっていく。かなり小さくなったアルミホイルを開くと、今度はおみくじみたいに結んだ紙が入ってた。紙を開いてみたら、なにかメッセージが書いてある。

『残念でした。大ハズレ！ 人生そんなに甘くないのよ』

やられた！

爆笑の渦が巻き起こった。笑ってないのはおれ一人だけ。笑うどころか、恥ずかしくて耳の先まで熱くなった。

こんなことなら、一人でこっそり開ければよかった。そうだよ。あのミカがしお

らしくチョコレートなんかくれるわけがない。おれの人生最高の感動は、笑いの渦の中に碎け散った。

ミカの奴、覚えてろよ。ぜったいホワイトデーにリベンジしてやる……。

次の朝。寒いし気が重いし、なかなか布団から出られない。いつそのまま熊みたいに冬眠したい。

だけど今日学校を休んだら、みんなに好き勝手なことを言われるに決まってる。

「ナオトはきつと昨日のシヨックで寝込んでるんだよ」

そんなこと言われてたまるか。意地でも学校に行ってやる。何事もなかったように軽い足どりで、爽やかな笑顔で登校してやる。立ち直るのが早いのがおれの取り柄だ。

「行って来まあす」

昨日は昨日。今日は今日。明日は明日の風が吹くんだ。

「ナ、オ、ト、くん」

よりによってケンちゃんだ。今会いたくないのに。

「いやあ、昨日は笑わせてもらったよナオト」

「昨日の話は一生聞きたくない」

「でもミカって変な奴だよな。せつかく美人なのに性格悪すぎるよ。そう思わねえ?」

「だからもう言うなって」

朝からこれじゃ先が思いやられる。

歩いてると、おれの顔を見ただけで笑いだす奴がいる。下を向いてクスクス笑う奴もいれば、おれを指さして地面にへたり込んで笑う奴もいる。失礼にも程がある。今度はいきなり後ろから頭を小突かれた。何なんだよ。ふり向いて睨みつけたら、ミカだった。

「あんたバカじゃないの。なんでみんなの前で箱開けんのよ。あたしまで笑い者じゃないの」

「おまえこそいい加減にしろよ。なんだよあれ。おれ人生最大の汚点だよ」  
周りの奴らがヒューヒュー口笛を吹いた。

「朝から夫婦ケンカすんなよ」

「あんたたち殺されたいの？」

「うわ、鬼嫁怖え」

無理だ。何事もなかったように爽やかな笑顔なんて、できっこない……。

一週間が過ぎると、誰もバレンタインデーのことを言わなくなった。おれとミカは、相変わらずケンカばかりかして。ミカとケンカしていると、ホントに楽しくて仕方ない。すごい美人なのに、めっちゃめっちゃ気が強くて手ごわい。こんな女の子、ミカしかない。

バレンタインデーは、とにかく悔しさと恥ずかしさがマックスで、気が治まらなかった。ぜったいホワイトデーにリベンジしてやるって思った。

だけど、そういう気もちもだんだん薄れてきた。三月十四日がホワイトデー。そして三月十七日が卒業式。おれがホワイトデーにリベンジしてミカを本気で怒らせたら、大ゲンカしたまま卒業することになるかも知れない。そんなの嫌だ。ほんとは好きなのに。

ミカはどここの中学に行くんだろう。卒業するまでに、それだけは聞きたい。もし同じ中学に通えないんなら、思いきって告白しちゃうかな……。

三月十三日。明日はホワイトデー。休み時間、ケンちゃんがニヤニヤしながらおれの肩をたたいた。

「ナオト、明日どうすんだよ」

「やめた」

「え？」

「ミカにリベンジしようと思ってたけど、やめた」

「なんでだよ」

「卒業前に、つまんないことでもめたくないしさ」

「カッコいいこと言うじゃん。ていうか、おまえほんとにミカのこと好きなんじゃないの」



「え、ち、ちがうよ」

「ほら、凶星だ。ナオトはわかりやすいよなあ。だったら告白すりゃいいじゃん」

「大きなお世話だよ。ケンちゃんこそ、どうなんだよ」

「おれ？ だめだめ。ぜんぜん脈ないし。言っとくけどミカじゃないから安心しろよ。あーあ、中学行ったらおれにもモテ期が来んのかなあ」

三月十四日。ホワイトデー。ミカは学校に来なかった。

おれのリベンジが怖くて来ないって言う奴もいるけど、それはちがう。ミカがそんな肝っ玉の小さい女の子じゃないことは、おれが一番よく知ってる。

どうしたんだろう。風邪でもひいたのかな。今日ミカに言うセリフを、寝る時間削って考えたのに。

「おれはリベンジしないよ。ホワイトデーだから、白紙に戻すよ」

そしたらミカは、なんて言うだろう。

「なにカッコつけてんのよ。あたしに勝てないだけでしょ」

って言うかな。なんて考えながらポケットに手をつこんだら、中になんか入ってる。出してみたら、赤いチェックのハンカチだった。

「これ、ミカのだ」

給食のプリンを横取りしてミカのスプーンでおでこを切ったとき、貸してくれたんだ。すっかり忘れてた。

「このハンカチ、ミカに返さなきゃ」

だけど次の日も、その次の日も、ミカは学校に来なかった。

ほんとに、どうしたんだろう。明日は来るよな。来てくれるよな。卒業式だから……。

「ただいまあ」

「直人、ちよっとこれ着てみて。卒業式に来るブレザー」

「母ちゃん。おれ、そんなの着ないよ」

「なに言ってるのよ。晴れの卒業式なのに。とにかく一回着てみてよ」

仕方なくブレザーをはおったら、中で体が泳ぐぐらいブカブカだった。鏡で見たら、ブレザーが大きすぎてコントの衣装みたいだ。

「これ、でかすぎるよ」

「いいのよ大きい方が。男の子は、これからどんどん背が伸びるんだから」

「これからだったって、卒業式明日だろ」

「あら、思ったより似合ってるわよ」

思ったよりって、どう思ってたんだよ。

「直人、ネクタイもあるのよ」

「ネクタイなんか、やだって」

「つけてみないと、わからないじゃないの」

「わかるよ。ぜったい似合わない。おれ自信あるよ」

「もう、しょうがないわね。せっかく買ったのに、もったいない」

「父ちゃんにあげりゃいいじゃん」

「それもそうね。あんた、たまにはいいこと言うじゃないの」

三月十七日。今日はいよいよ卒業式。だけど、でかすぎるブレザー着せられるし、ミカは学校に来るかどうかわかんないし、気分がさえない。卒業式ってもっと晴れ晴れした気もちになるもんだと思ってたのに。

「よう、ナオト」

「ああ、ケンちゃん」

ケンちゃんは紺色のブレザーにストライプのネクタイ。けっこう決まってる。きっとブレザーのサイズがぴったりだからだ。

「ナオト、それ自分のブレザー？」

「一応おれのだよ。でかすぎるけど」

「ミカ、今日来るかな」

「どうかなあ」

「来てほしいくせに。おれは応援してるよ、ナオトとミカ。ミカと本<sup>ガ</sup>気<sup>チ</sup>でやり合える奴ってナオトしかいねえじゃん。おれはもっと優しくしておっとりした子の方がいいけどさ」

「ケンちゃん、誰が好きなんだよ」

「一発で当てたら教えてやるよ」

「よし、ぜったい当てる。ヒントちょうだい、ヒント」

ケンちゃんとうだうだ言いながら学校へ行くと、女の子の集団の中に、頭一つ出るくらい背の高い子を見つけた。

ミカだ！

紺色のブレザーにチェックのスカート。襟元に赤いリボンをつけたミカは、品のいいお嬢様に見えた。同じような格好をした女の子たちの中でも、ひとときわ輝いてる。

なんだかブカブカのブレザーを着てる自分が恥ずかしくなってきた。声をかけづらくて立ち止まっていたら、ミカがおれに気づいて近づいてきた。

「ナオト、がんばれよ」

ケンちゃんは耳元でそう言うと、向こうへ行ってしまった。

おれの前に来ると、ミカはいきなりこう言った。

「ナオト、七五三みたいじゃない」

「ほっといてくれよ。着たくないけど着せられたんだよ」

「でしょうね」

「ミカ、なんで学校休んでたんだよ」

「あ、心配してたんだ」

「してねえよ」

「だったら聞かないですよ」

どうしていつも、こうなっちゃうんだらう。

「それよりあたし、ナオトに話があるの」

「なんだよ、話って」

「今は言えない。今日の午後四時に、さくら公園のブランコの所に来て」

「え？」

「ぜったい来てね。大事な話なの」

「おい、ミカ……」

ミカはくるりと背を向けて、他の女の子たちの方に走っていった。

卒業式が始まっても、ミカのことを気になって気になって仕方がない。大事な話つ

てなんだろう……。

ミカはもともと変わった奴だけど、最近のミカの行動はまるつきり理解できない。バレンタインデーに変なハズレくじくれたり。ホワイトデーから三日も続けて学校休んだり。卒業式に来たと思ったら、大事な話があるとか言って呼び出したり……。

「本田直人くん」

「は、はい」

周りの奴らがクスクス笑ってる。危うく卒業証書をもらい損ねるところだった。

午後四時五分前。約束どおりさくら公園に行くと、ミカが一人でブランコに座ってた。デニムのショートパンツにオレンジ色のパーカーをはおったミカは、卒業式のときはちがって明るくて活発な女の子に見えた。

「ちゃんと来てくれたんだ」

「これ返しに来たんだよ。ずっと借りてたから」

そう言って、赤いチェックのハンカチを差し出した。

「ああ、それあげるわ」

「え？」

「バレンタインデーのお詫び。いくらなんでもやり過ぎたから」

ミカの言葉とは思えない。びっくりして鳥肌が立った。

「どうしたんだよ。ミカがお詫びなんて気もち悪いじゃん」

「失礼ね。どういう意味よ」

話を聞こうと思って、おれもミカのとりのブランコに座った。

「バレンタインデーにチョコレートあげる子はいっぱいいるけど、ハズレくじなんかあげるのはあたしだけでしょ」

「そりゃそうだよ」

「あたり前のことは、すぐに忘れちゃうのよ」

いったい何が言いたいんだろう。

ミカがゆっくりブランコを漕ぐと、肩にかかる髪がサラサラゆれた。

「あたし引っ越すのよ」

「引っこすって、どこに」

「アメリカ」

「アメリカ!？」

「お父さんの転勤で、三年間アメリカに行くの」

三年間アメリカに行く……。

「あたしは嫌だって言ったのよ。あたしは日本に残りたいって。それで親にスト起こして学校休んだのよ。でも引っ越しの準備も入学の準備もできちゃってるし、あたしはまだ子供だから、一人で日本に住むなんて無理じゃない」

ミカはブランコに座ったまま小石を蹴った。

「そっか……。おれは中学行っても、今までみたいにミカとふざけて遊べると思っ  
てたけど、アメリカに行っちゃうんだ……」

「アメリカの男の子は、女の子に優しいんだって。レディーファーストだから」

「へえ。アメリカ人はイケメンだしな。背が高くて、金髪で、青い目で」

「でも、あたしは金髪も青い目も好きじゃないのよ。レディーファーストなんて大  
きなお世話だし」

ミカは誰に対しても毒舌なんだ。

「あたしは、いつもバトルできる日本人のチビが好き」

「え?？」

ミカが急にブランコを下りた。

「アメリカ行ったら手紙書くね」

そう言うのと、すごいスピードで走っていった。おれが追いかけてしようとした時には、  
もうずっと向こうの方にいて、必死で追いかけたけど、追いつけなかった。

「ミカー！ おれも、おれもミカが好きだよお！ 大好きだよお！」

どんどん小さくなっていくミカの背中に、思いつきり叫んだ。なぜだか涙が出て  
きて、一人で泣きじゃくった。

春休みの初めに、四年間続けてきた少年サッカーの引退試合があった。試合に四  
対二で勝って有終の美を飾ったら、あとは燃え尽きたみたいになることがなくなっ  
た。ミカはアメリカに行っちゃったし。

小学生でもなく、中学生でもなく、中途半端な春休みを、ただダラダラと過ごした。毎日サッカーしたり、野球したりして遊んだ。雨の日はゲームをしたり、友だちとうだうだししゃべったりした。

朝はまだ寒いからなかなか布団から出られなくて、いつまでもまどろんでいた。

「直人、いつまで寝てんのよ。いい加減に起きなさいよ」

「ううん……あとちょっとだけ」

「そんなにダラダラしてたら、学校が始まって朝起きれないわよ。中学校は今までより遠いんだから」

「学校が始まったら起きるよ……」

「まったくもう。それよりあんた、アメリカから手紙が来てるわよ。ミカシラカワって女の子じゃないの」

ミカシラカワは

急にバチツと目が覚めて、とび起きた。

「どこ？ 手紙どこ？」

「なによそれ。ちゃんと起きれるじゃないの。明日から毎朝ミカシラカワって言うて起こすわよ」

「いいから手紙貸してってば」

「はい、ミカシラカワ」

「母ちゃん、おれ今から着替えるから、あっち行ってよ」

「はいはい、ミカシラカワ」

ミカから手紙が来た！ 宛て名も全部ローマ字で書いてある。急いで封を開けた。

Hee-o-o! ナオト元気？

「いきなり英語かよ」

来る前はイヤだったけど、アメリカは思ったより快適です。わたしと同じように日本から来てる女の子がいて、すぐ友だちになりました。

「へえ、そうなんだ」

昨日その子といっしょにマクドナルドに行ったら、ハンバーガーがメガサイズでびっくり！ こんなの毎日食べてたらデブになっちゃうから、できるだけ和食を食べようと思います。

「しっかりしてんじゃん」

作るのはお母さんだけど。

「そうだよな」

今度の日曜日は本場アメリカのディズニールランドに行くから、すごく楽しみ。うらやましいでしょ？

「なんかめっちゃめっちゃ楽しそうじゃん」

ナオトも手紙ちようだいね。ちゃんと読める字で書いてね。

「悪かったな。字が下手で」

わたしもまた手紙書きます。気が向いたら。

「気が向かなかつたら書かねえのかよ」

あ、そうそう。金髪で青い目のボーイフレンドができました。

「えええ！」

じゃあまたね。Bye Bye

「なんだよこの手紙……」

P. S. 今日は四月一日です。

美香より

おわり